「マイノリティへの配慮の均衡点は無知の知である。」

わたしは、前期の議題で「マイノリティへの配慮の肥大化」を挙げました。今、海外では特に盛んに、マイノリティの権利主張、ダイバーシティの必要性が多く語られています。日本にももちろんその波はあり、身体・精神障害者やLGBTQ、延いては今まで不当な扱いをうけていた女性までの権利が強く主張されるようになっています。マイノリティへの配慮が推し進められていくという流れはもちろん正当で素晴らしい流れではあるのですが、その変化が進められていく中でやはりいくつかの違和感が生まれています。

一番顕著であるのが、「アメリカの小学校のトイレが男女共用のもののみになった」ことです。性の多様化に対応するための策だと考えられますが、この変化は、従来のものと比べて明らかに不便さ・不安さを生んでいます。一方で、性的マイノリティ張本人たちは、この変化によって果たして大きい便益を受けているのか、かなり疑問に思えます。さらに細かい例でいうと、日本では今様々な場面で障害者の表記が「障がい者」へと変わっていっています。単に、「害」という文字のマイナスイメージを払拭しようとするための動きですが、これも同様に、張本人たちは基本的に求めているわけではない、それどころか「配慮してあげてる」感が逆に苛立つというような指摘まであります。

浦井先生の指摘を借りれば、アメリカで起きた「Black Lives Matter」の運動は、大統領選の時期に恣意的に起こされた運動であると言います。マイノリティへの配慮が政治的扇動にまで使われ始めているのです。

当然の前提として、マイノリティへの配慮の目指す先は、「マイノリティが生きやすい社会を作ること」であり、「配慮していることのアピール」であってはならないはずです。この食い違いは一体どこで発生しているのか、そしてマイノリティへの配慮のあるべき姿はいったい何なのかを、考えたいと思います。

まず、マイノリティへの配慮が一切為されていなかった時期について考えます。例として取り上げる少数者は、ゲイの方と設定してみます。男性は女性が好きなのが当たり前で、同性を好きになることはおかしい、という価値観が社会に出来上がっているため、悪意のない善良な市民であっても、ゲイを忌避してしまいます。ゲイは何も悪いことをしていないのに、自分の本来の姿を隠すことを強いられます。この社会は、当然不健全です。

マイノリティの配慮がされた社会を想定してみると、ダイバーシティの考えが広く知られているので、悪意のない善良な市民は、ゲイを受け入れ、認めます。ゲイもカミングアウトしやすくなり、自分を隠さずともある程度社会的に生きてゆくことができます。ここまでは健全です。

しかし、「マイノリティへの配慮」という行為にも箔がつき始め、社会貢献のアピールの手段になったり、さらには地方自治体や大企業などは配慮をすることが当然であるという価値観へと変容したりします。形骸化した「配慮」という行為は本質的でないため、誰も求めていないような変化が起こってしまうのです。

また、社会には、「悪意を持った善良でない市民」も多く居ます。彼らは根本的に、他人（特に弱者）に対して攻撃的であり、倫理的な価値観が欠落しています。善良でない市民たちは、どれだけ配慮が進んだ世の中であろうと、以前と変わらず彼らを攻撃するので、少数者は（頻度こそ減るものの、）結局ある程度のダメージを受けます。

私は、善良でない市民にどれほど働きかけても、彼らは変わらないままであると考えます。つまり配慮をいくら続けたところで、少数者は一定のダメージを受けてしまうのです。（少数者に該当しない、いわゆる「一般人」も、同様に善良でない市民からある程度ダメージを受けています。）そして配慮を進めた先に「配慮の形骸化」があるのだとしたら、それより前に配慮を止めるべきなのではないでしょうか。

均衡点は、「善良な市民がマイノリティの存在を認識し、受け入れる」という位置だと考えます。「マイノリティを助けよう」と奮い立つことは、もちろん最初には必要ですが、いつまでもマジョリティ側がそれに固執すると、結果誤った方向に配慮が進んだり、それが箔となる社会になったりします。

マイノリティの心は、結局当事者にしか理解できません。それを無理に推し量って変革を進め続けるよりも、「自分と違う、自分は知らない価値観・心を持っている人がいる。」ということをしっかりと理解する、一種の無知の知の境地で立ち止まることが必要なのではないでしょうか。